

聞名仏教

第 187 号 毎月発行
(発行日) 2026 年 4 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号・番号 17810-7-259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

人間性の発見

佐々木蓮磨

真宗教団を同朋教団と申しております。そこで近ごろは、同朋生活運動というものが力強く叫ばれているのでありますが、ややもすると、ことばだけをかきまわるといふことにもなりかねないので、まず同朋精神の根拠を明らかにすることが大切であると思えます。

大分県の中津は、有名な明治の先覚福沢諭吉ゆききちさんが生まれられた土地ですから、中津の駅頭には福沢さんの名句「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という標語が掲げられてあります。もちろん封建思想のまだ盛んであった明治の初年に、このような人間平等の精神を強調されたことは、驚異に値することではあります。また納得の行きかねる重要な点が残されているように思います。それは天が人間を平等に作ったと言っても、実際においては各人各様であって、決して

て平等ではありません。例えば体力や知能の点でも、地位や財力の点でも、大いに違っております。ここにおいて今ひとつ突込んで「何が故に人間は平等であるか」という根拠を明らかにすべきであると思えます。

この点について、最も明快な決判を与えて下されたのは、何んと言っても親鸞聖人です。もちろん学問が深いとか、人格が高いとか、また修行を積んでいるとか言った点では、親鸞聖人以外にも沢山の名僧知識はおられたと思いますが、人間探求の点では、おそらく親鸞聖人の右に出るかたはなかったらうと思えます。

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮こへをいだけばなり」とは、明らかに人間の本性を突き止めて下さった言葉であります。ある人が、「この言葉は、人間がこの世界に生まれるようになってから、誰一人として言ったことのない、歴史的な言葉である」と言われましたが、いかにもその通りでありました。この言葉によって、人間というものの本性が明快にアバキ出されて、人間のもつ優越感と劣等感はおのずから解消され、みんなが同じ凡夫の立場に立ちかえって、手をとり合うことができるのであります。

親鸞聖人までは、凡夫と聖者の区別というものが残されていたのでありましたが、親鸞聖人の大胆な宣言によって、初めて二千年來破ることができ

てから、誰一人として言ったことのない、歴史的な言葉である」と言われましたが、いかにもその通りでありました。この言葉によって、人間というものの本性が明快にアバキ出されて、人間のもつ優越感と劣等感はおのずから解消され、みんなが同じ凡夫の立場に立ちかえって、手をと

きなかつた凡聖の境界が打ち破られ、ここに万人が自力作善の化粧を洗い去って、真実の人間に立ち帰る道が開かれたのであります。何という広大なことでありましょうか。この人間性の発見こそは、人類史上に特筆すべき画期的精神革命といっても過言ではないでしょう。

人種差別の弊ひは、民主主義を説き、ヒューマニズムを叫んでいる先進国においてすらも、なお依然として残存し、白人と黒人との対立抗争は今なおつづけられており、思想的対立も冷たい闘争をつづけているではありませんか。今こそ全人類が、親鸞の叫びに耳を傾け、賢善精進の擬装を脱ぎ、虚仮不実の人間性に目醒むべき時であります。

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日 (水)

午前十時始

午後二時始

法話 住職 土井紀明

清沢満之先生に学ぶ

⑫

(清沢満之の言葉)

『求施の原則』

大悲廻向の分限に於いて、互に相愛相扶すべし。その相愛相扶の行為は、左の求施の二則によるものなり。

第一則

汝の有する所は求めに應じて之を施すべし。

第二則

汝の欠くる所は、之を有する者に就いて求むべし。

この原則によりて之を観るに、我等は求施の何れに於いても、交換的の心地に住するを要とせざるなり。有るものは与えよ。無きものは求めよ。其有無は共に絶対無限の分配に出づるを信ぜよ。其分配の差別不同は、我等凡智の思議し能はざる所にして、亦思議するを要せざる所なり。天の配賦に対して疑難に耽るは、その徒勞たるを知るべきなり。唯一つ心得べきは、

我の所有はその実皆な是れ天の所有にして、我等は一時其の保管と使用とに任せられたるのみ。然るに、若し之を我等固有のものと執せば、全く天意に背戻するものたること

是なり。尚一言の添うべきものあり。無きものは求めよ。而して終に与えられざらんか。是れ如来の我に歸去来を命じ給うなり。喜んで此の命に服従すべきなり。有るものは与えよ。而して与え尽して、求むるに終に与えざらんか。是れ亦歸去来の命なるを知るべきなり。

一つは、自分の生きるのに欠けている物は、これを持っている者に求めなさい。この原則によつて考えてみるに、私たちは与えるにしても求めるにしても、交換するとうように考える必要はない。ただ持っているものは分かち合い、持つてなければ他に求めなさい。人それぞれの持ち物に多寡はあるが、もともとすべてが如来よりの頂き物である。如来よりの頂き物に多い少ないがあることに關しては、愚かな私たちの計り

（意識）如来が私たちに与えてくださる恵みにおいて、私たちはお互いに愛し合い助け合うべきである。その助け合いの行為に、二つの求施の原則がある。

一つは、自分のもっている物は、求めに応じて分かち与えなさい。

う点である。それなのに自分の持ち物をどこまでも「我が物」として執着するなら、それは如来のお心に背くことになる。

なお一つ言うべきことがある。それは生きるのに必要なものが自分になれば、これを他に求めなさい。しかるに他に求めてももらえなかつたら、これは如来が歸去来（無いままにおれ）と命じられていと受け取りなさい。このような如来の命じられることには喜んで従うべきである。そして持てる者は他の求めに應じて分かち合いなさい。与えてしまつて自分の物がなくなつて、今度は自分が他に求めるが、求めても与えられなかつたら、これも如来の思し召しと受け取つてそれに従いなさい。

以上の清沢師の求施の二則を読むと、とてもこの通りに生きることは難しいと感じる。しかしここで清沢師がいつてゐることは、それぞれの人の所有物は、本来自分の固有物ではなく仏物であるといわれるのである。こういう教えに

照らされて私たちはいかに如来のものか自己の所有物として盗んでゐるかが知らされ、自分の所有欲の深さを知らされる。

この清沢師の「求施の原則」の中で、最も大事なところは「唯一つ心得べきは、我の所有はその実皆な是れ天の所有にして、我等は一時其の保管と使用とに任せられたるのみ」という内容である。ここで清沢師は、私たちが自分の所有物と思ひ、そのように取り扱つてゐる物は、動産であらうと不動産であらうと、食料もマイカーも、家具や衣服、さまざま家電や道具も、いやそのような外部のものだけでなく、この身体も「我が物ではない、如来の物である」といわれるのである。それら如来の物をただ「一時的に私が保管し、その都度それを使用」させていただいているのである。要するに「すべては如来の物」すなわち「仏物」である。裏からいうと、すべての物は「我が物ではない」ということである。我が物、我が所有物などというものは本来

ないものである。蓮如上人のお話に、

「蓮如上人、御廊下を御とおり候いて、紙切のおちて候いつるを、御覽ぜられ、へ仏法領の物を、あだにする（注）かや」と、仰せられ、両の御手にて、御いただき候うと云々。総じて、かみきれなんどのよくなる物をも、御用と、仏物と思し召し候えば、あだに御沙汰なく候いしの由、前住上人、御物語候いき」（蓮如上人御一代記聞書）

（注）あだにする――粗末にする
とある。紙切れ一枚も仏物であると教えられている。

私の一切の物は皆仏物であることは間違いないことであるが、これがなかなか実感にならない。これが実感になってくるには、どうしたらいいのか。それを真宗の教に尋ねると、アミダ仏の本願を信じて「撰取不捨の利益」をいただくことによつてであろう。そこから次第にすべては仏物であるという見方、実感がぼつぼつではあるが生まれてくるのだと思う。

真宗の信心の利益は「撰取不捨の利益」であり、それは信心の本質である「智慧」によつて知らされる。信心の智慧から一切は仏物と観る見方が生まれくるのだと思われる。撰取不捨の利益とは私の全体がアミダ仏に撰め取られて離れないと知る利益であり、アミダ仏と私は一体であると知る智慧、それが信心の智慧でもある。こういう信心なしに「一切は仏の物である」という物の見方が生まれることは非常に難しい。

そして、一切は仏物であると知られてくると、それゆえ持てる者、持たざる物がお互いに相互扶助しあうとか融通しあうということが道理であるし、自然であると理解されてくる。

そして「我等は求施の何れに於いても、交換的の心地に住するを要とせざるなり。有るものは与えよ。無きものは求めよ」といわれているが、人の所有物の多寡はそれぞれの縁による。その中で、我が物というものは本来はないものであつて、皆仏物であると

いうことが実感的な人は、他に与えることもまた他からもらうことも、惜しむこともなければひけめもないのである。それゆえお互いに持ち物を（交換する）という考えもないであろう。へ自分の物を他者に与えたら、今度は他者から援助を受けるのは当然だ。などという考えもない。ただ縁があつて自分に持てる物があれば施し、自分に無くて困つている場合は他からいただく。恩を着せることもないし卑屈にもならない、自然である。

ここで「其有無は共に絶対無限の分配に出づるを信ぜよ。其分配の差別不同は、我等凡智の思議し能はざる所にして、亦思議するを要せざる所なり」といわれている。「絶対無限の分配」といわれるが、筆者は、ただ縁によつて、人それぞれの持ち物には多寡があると受け取っている。それは縁によるのである。自分に物が欠乏して生計が難しくなつたとき、他から頂けばよい。他とは政府であつてもよいし、富者からでもよい、親族でもよい

し、隣り近所からでもよいのである。その上で、もし欠乏して与えられなかつたら、それこそ清沢師がよく言われるように「パンなくば死ぬ」だけである。

こういう話は極端な話だといわれそうであるが、清沢師のいわれるのは自分の「所有物」に対する、あるいは生計に対する最後の心得をどうあるべきかの話であるといえる。

どちらにしても人間は自分の所有物にたいしてどう考えているかによつて、浅ましくなるか清らかであるか、安らかであるか不安であるか、他を押さえつけるか他に対して自由かなどに深くかかわってくる。自分の所有物の有無や多寡そしてそれにもなう生計の問題に対して、自他の持てる財物をどのように見るかという問題は人間の生き方に深く関わる大事な事柄である。

さてこうした問題に対しては、多くの識者は社会の生産と分配・消費の問題として扱ふ。大きく分ければ資本主義か社会主義かという観点があ

らう。生産と分配のほかに、労働者の賃金、金融の投資の問題、社会福祉などのあり方が問われるのであり、社会政策とか政治体制のあり方として考えるのが一般である。

こういう視点からは「有無は共に絶対無限の分配に出づる」などという清沢師の考えは体制側・統治者側にとってはなはだ都合のよい論理に見えて、社会批判の眼を失うのではないかという批判が出さうである。

しかし「一切は仏物である」という真理から、富や資本を独占する体制や権力は批判され、それに反対する運動が起こるのは当然である。こういう運動は「富をこつちによこせ」というような物ねだりではなく、道理に反したあり方へのあるべき正当な動きだといえる。

そこから、共産主義のような唯物論的人間観ではなく、「人間はみな仏の子」であるという平等にして尊いという人間観をベースにした「仏教社会主義」という思想もあつて得るし、実際にそう唱えた仏教者もいる。

住職雑感

なぜお仏壇（お内仏）が必要かというと、第一の理由は自分の修行のためであり、修行の大事なお道具がお仏壇です。自分の修行のためとされている人は少ない。亡き人の供養の為、先祖の恩を忘れない為、死者にであう為といわれる。それもたしかに大事な意味です。しかしお仏壇の本質は、私が本当の自己にであう為、真の人生の支えを見いだし、その支えに従って人生を豊かに生き、ついには仏になる為です。真宗の修行は他力の修行で易しい修行です。まずお念仏をその前で称える（称名行）、これが一番大事な行です。そしてそれに伴って礼拝（礼拝行）し正信偈を誦読（誦誦行）する。そしてお文なり歎異抄などの聖典の言葉を読む。これは（観察行）、そして、それに先だって、お仏壇を掃除し、お花をそなえ、線香を焚き、灯明をとます。これは（讃嘆供養行）。この五つの行を毎日する、これが他力の修行である。この世に私たちは遊びにきたのではなく、本当の真実にあい、それに沿って生きるためにお仏壇が必要なのです。近年、仏壇を残すと子や孫が世話をしなければならぬので、迷惑になるという廃棄するのは残念です。

共にいます阿弥陀仏

私たちのナマのいのちはいつでも「今ここ」にしか存在しません。一時間前はすでに無く、一時間後はまだ来ていません。いつでも「今」だけがあるので、そして私が実際「いる」のは今考えつつある「ここ」だけであって、沖繩や東京にいるわけではありません。こうして日々は「今ここ」の連続のほかありません。その中で喜んだり悲しんだり安心したり不安になったりしています。こうしたさまざまな思いに先だって「今ここに生きている」という根本的な事実があります。

そして今ここに生きているのは、私たちがいろいろ考えたり計らったりするから生きているのではなく、我ならざる無量無数のほたらきによつて生かされているのです。空気がなければ、あるいは太陽が照っていないければ一瞬も生きられません。そのほか水や食物や家やなどがなければ生きられません。身体も自分の造ったものではなく、心臓や肺臓も寝ている間も動いてくれるから生きておられるのです。一番身近な心の働きも同じです。

飾りも正面に名号が掛けてあり、その前に香炉が置いてあるだけある。狭い自室には小さなテレビがあり、粗末な家具があるだけで値打ちのあるようなものは一つもない。私が大学生の時、松並師が「あなたはこの（奈良）から京都の大学へ通つたらよい、生活はここでしたらいい」とまでいわれた。生活費はいらなくなり松並師の元で生活できるのだから、こんな良いことはなかったのであるが、聞法心の弱い私は師のような念仏者の鏡のような方のそばで生活するのは窮屈と思つて断つたことであつた。師は朝はパンとコーヒ―、昼はうどん一杯、夜は多少のおかずとお酒というような飲食の風であつた。痩せておられたので栄養失調になるのではないかと心配するほどだつた。そんなことで師にはお金に対する執着を感じなかつた。師の法話のなかでも、すべては如来様のものというお考えが随所にうかがわれたことであつた。

しかし今ここでは、そういう社会体制とか社会政策などがいかにあると、個人一人ひとりの日々の現場に於いて、また現実に自分と他との間の財物のやりとりという毎日の日常に於いて、自他の「所有物をどう見るか」という根本的な物の見方として、清沢師の言葉から学ぶことができる。我が物というものは本来はないものであつて、皆仏物であるということを実感的に生きていく人がいるかということ、私を含めて極めて少ないのが現実である。しかし私が出会つた人の中に、自分の持ち物はすべて仏物であるという実感に生きていた人がいた。たとえば、念仏者の松並松五郎師のような方である。師の生活はまさにそれを感じずにはいられないものであつた。師は一生の間に、行き場のない数人の人を家に住ませ生活の面倒をみた。自分自身の生活は実に簡素で着ている服はおよそ時代物のブレザーを着ていたし、家の中はがらんとしてこれといった贅沢なもの一つもなかつた。仏間のお